

(2) ちくさんをさかんにする。

養さんとともに古くから、月館町で行われてきたものの一つにちくさんがあります。

ちくさんとは、牛、ぶた、めん羊、にわとりなど育て、人々の生活に利用することです。月館町ではどのようなちくさんが行われていたのでしょうか。

下手渡に、伊達郡にめん羊を広めた人々の記念ひが建っています。昭和9年に建てられました。

明治時代から大正時代の農業は、たいひが肥料の中心でしたが、それだけではまに合わず、金肥（化学肥料のこと…お金を出して買う肥料のためこうよばれた。）も、しだいにたくさん使われるようになったのです。

そこで、なんとか家ちくのふんにようを利用して、たいひをふやしたいと考えた人々が、めん羊を育てることを思いつきました。佐藤五郎、佐藤鑑一、坂本稀三、熊坂六郎兵衛らは、大正9年、千葉県からめん羊数頭を買い入れ、共同で育てることを始めました。

当時、日本では羊毛を輸入にたよらず、国内でも生産をふやそうとしていました。めん羊をかうことは、国の方針に合うだけでなく、羊毛や羊肉を売って農家をたすけることにもなるため、下手渡に「小手郷畜産組合」の事務所を置き、増産につとめたのです。

現在では、羊毛をとるためにめん羊を飼っている農家はなくなりました。どうしてなくなってしまったのか調べてみましょう。

月館町のちくさんとしては、御代田、糠田、月館、上手渡で、にわとりを飼っている農家があります。

